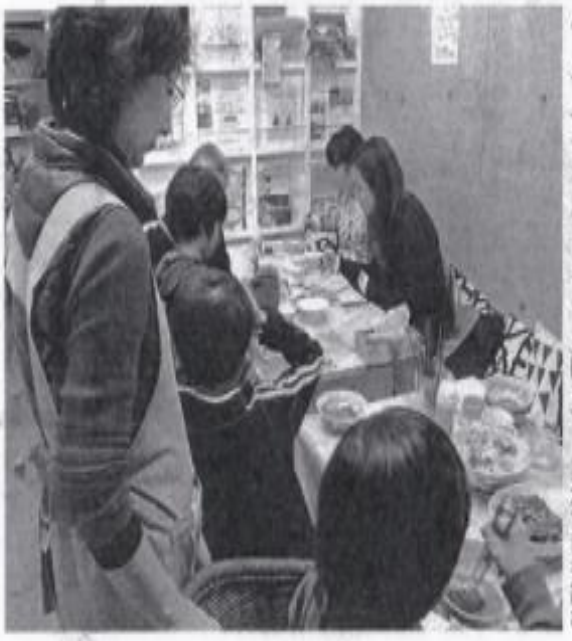
貧困家庭支援 無料で夕飯

ご近所を満腹に「こども食堂」

世田谷のグループ 地域が差し入れ・寄付



スタッフが見守る中、食事をする子どもたち＝東京都世田谷区で

日本では今、子どもの六人に一人が貧困状態にあるとされる。ひとり親家庭では、親が夜遅くまで働いても収入が少なく、満足な食事を与えられない子どもも多い。そんな子どもたちが一人で来て、無料で夕飯が食べられる「せたがやこども食堂・みっと」が、東京都世田谷区にオープンした。地元の女性グループが月二回運営し、子どもたちは大家族のような温かな雰囲気の中、食事を楽しんでいる。

「ご飯炊けるまで待ってて。待って食べるご飯はおいしいよ」「次のおでんの具はロールキャベツにして」。十一月下旬、食卓を囲んでメンバーと子どもたちの会話が弾んだ。

この日のメニューはハンバーグ、サラダ、コーンスープ。漬物やパウンドケーキは近隣住民からの差し入れだ。小突き合いを始めた低学年の男の子二人には、メンバーが「はい、座って食べようね」と促した。

こども食堂は毎月第二・第四木曜日の午後三時から八時まで、東急世田谷線松原駅近くで開く。運営メンバーは、料理サークルや屋上緑化など地域活動を通じて知り合った五十～六十代の女性六人。「子どもの貧困を報道で知り、目の前の子どもたちを助けようと集まった」と代表の村上由美さんは言う。

食事前には、区内の日大文理学部の学生が、子どもたちの遊び相手をし、勉強を教える。高校生までの子どもや保護者らの利用を想定しており、夕食は高校生まで無料、大人三百円。食堂名の「みっと」は「みんなで、一緒に、楽しく、食べよう」の頭文字「mit」から名付けた。

開設に先立ち、近くの小学校二校、中学校一校、高校一校を通じチラシを配布して来場を呼び掛けたところ、十一月十二日の初回は子ども二十四人、大人十六人が訪れた。親子連れ、中学生の友達同士、保育園児の妹を連れて二人で来た小学低学年の男子もいたという。

世田谷区は比較的裕福な地域とされる。「でも、給食以外はなかなか口にできない、ひとり親の帰宅が遅く居場所がない、という子どもはいる」と、地区の主任児童委員蒲牛恵美子さん（ぎも）。チラシを託した学校の校長からも「学校は家庭の状況まで踏み込めない。地域で支えてくれるのはありがたい」と期待されているという。

食材は寄付や差し入れなどでまかなっている。「地域の大人や近隣の商店を巻き込みながら、子どもたちが安心して楽しめる場所を目指したい」と村上さんは話す。

せたがやこども食堂・みっとへの問い合わせは、メール＝setamitt@gmail.com＝へ。

子どもの貧困率 ひとり親世帯の54％に

厚生労働省の調査では、二〇一二年時点で手取り所得が一般的な水準の半分以下しかない世帯の十八歳未満の子の割合は16・3％で、六人に一人に当たる。最近二十年で約3・5％増えている。ひとり親世帯など大人が一人の世帯では、この貧困率が54・6％に跳ね上がる。

子どもの貧困は進学との関連も高く、生活保護世帯の子どもの高校進学率は91・1％で全体より7％低い。大学や短大などへの進学率は31・7％で、全体の半分以下となっている。

貧困状態にある子どもに食事を提供する「こども食堂」や無料学習支援は市民グループなどの手で各地に広がりつつある。パッケージ不良や規格外などの理由で売り物にならない食品を企業などから寄付してもらい、生活の苦しい家庭に届ける「フードバンク活動」に取り組む団体も増えている。

一方、政府が子どもの貧困対策の目玉として始めた「子供の未来応援基金」は、募金開始の十月から約二カ月間で民間から集まった寄付金が約三百万円にとどまっている。

一斉休校

利用者増 受け入れ拡大
感染予防へ 弁当配布に

子ども食堂 試行錯誤

新型コロナウイルス感染症の拡大による休校措置を受け、貧困家庭や共働き家庭の子どもたちに食事を提供する県内の「子ども食堂」は需要が高まる中、活動の拡充や継続に向けて試行錯誤が続いている。休校で新規利用が増加し、受け入れを拡大する団体がある一方、感染予防のため人が集まる場所での食事提供を休止し、弁当の配布に切り替える団体も出てきた。

福島市の「子どもカフェたまご」は集会所で毎月1回の開催を休止したが、週1回の頻度で市販の弁当を配布することを決めた。休校後の新規申し込みが3分の1を占めたという。代表の斎藤真智子さん(43)は「共働きの保護者や留守番をする子どもたちの役に立ちたい」と話す。頻度を増やしたのは、活動の重要さを認識しているからだ。

子どもたちに弁当を提供する会津若松市の「OHANA食堂」

同市の吉井田学習センターで食事を提供する「よしいだキッチン」を開くNPO法人ピーンズふくしまは、医療従事者を配置した上で開催する。夕食の提供はやめ、子どもたちにパンを配るという。同法人の江藤大裕さん(43)は「地域の皆さんから後押しを受け、開催を決めた。こういう状況だからこそ、子どものために活動したい」と決意を新たにしている。

いわき市でNPO法人共創のまちサポートが運営する「コミュニティ食堂」は月2回、土曜日に開くランチは休むが、平日に週2回の頻度で提供している朝食は、「一日のスタートで重要」として実施する。

休止する子ども食堂もある中、会津若松市で活動する「OHANA食堂」は毎月1回の活動を毎週1回に拡大した。スタッフで話し合い、縮小ではなく拡大を決めた。毎週木曜日に昼食を無料提供し、持ち帰り希望の人には弁当を手渡す。

運営するNPO法人母と子の生命をつなぐオーバージーン理事長の板倉志穂さん(45)は「さまざまな事情を抱える子どもがいる。休校が負担にならないよう手伝いしたい」と思い金くしている。

教員の「朝会」動画配信

子ども支援事例紹介 文科省HP

動画配信サイトで「朝会」を開いて励まし、自宅で作れる料理のレシピを学校サイトに載せる―。文部科学省は、各地の学校で一斉休校が続く中、子どもたちの学習や生活を支援する取り組み事例をまとめ、ホームページ(HP)で公開した。「学校の臨時休業の実施状況、取組事例等について」と題した資料で、文科省HPのトップからアクセスできる。

教員が毎朝「朝会」を開き、動画配信サイトにアップしているのは横浜市立の中学校。違う教員が顔を見せ、子どもたちを励ましている。

東京都目黒区立五本木小では、栄養教諭が中心となり、学校HPで子どもでも作れる料理の作り方を載せている。ご飯の炊き方、みそ汁の作り方といった基本を写真付きで紹介。休校期間中を「生活を学んで暮らしを楽しむチャンス」と位置づけ、家族の協力も呼び掛けている。

長崎県対馬市立の中学校は、生徒に1人1台配布したタブレットを使って朝、決まった時間に健康状況を報告させている。体調不良や連絡がない場合は、教員が電話や家庭訪問をする。

子ども食堂

社高生が食事提供

加東 21日から月1回

加東市のNPO法人が運営する子ども食堂「ペイフォワード」で月1回、社高校（同市木梨）生活科学科の生徒がお子さまランチの提供を始める。21日の初回はケチャップライスやハンバーグなど3品にデザート付き。当日、子どもたちと一緒に食事をする生徒たちは「おいしいごはんと会話を楽しもう」と呼び掛けている。

家庭の事情で食事を取れなかったり、一人で食事をしたりしている子どもたちのために昨年11月、市内の有志が始めた。毎週土曜、社福祉センターで開設している。

同校による提供は、同法人が協力を呼び掛けて実現。メニューの考案と調理は、子ども向けの給食について授業で学ぶ3年の田中亜実さん(18)と前田伊代菜さん(18)が担当した。今後も授業の一環として3年生がメニュー作りと調理に当たる。

田中さんと前田さん

お子さまランチを考案した前田伊代菜さん(左)と田中亜実さん＝社高校

歩いて満喫 歴史ロマン

高砂

猫の保護や里親探しに取り組む保護猫カフェ「まーぶるかふぇ」（高砂市神爪1）が月に1回、子ども食堂を開いている。地域の小中学生らが集まり、猫と触れ合いながら思い思いに過ごす。居長の村田サヤカさん（30）は「猫がいると、子どもは心を開きやすくなる。学校でも家でもない、第三の居場所でありたい」と話す。

（小森有喜）

猫カフェで子ども食堂

保護や里親探しに取り組む

村田サヤカさん（左から2人目）らが続ける子ども食堂＝いずれもまーぶるかふぇ

同店は加古川市の不動産会社「ジャムホームエステート」が2017年に開設した。地域住民らの依頼を受け、捨て猫などを引き取って新たな飼い主につないでいる。現在は30匹がおり、利用者は30分400円で猫と触れ合えるほか、猫がいる部屋とガラスで区切られた飲食スペースで、軽食もできる。希望者は、猫を引き取るための手続きをする。

「第三の居場所に」

保護された猫と触れ合う子どもたち

子どもの孤食を防ごうと昨年1月から毎月、定休日を利用して子ども食堂を始めた。「保護された猫と接することで、命の大切さも感じてもらえるのでは」と村田さん。

子ども食堂の利用は無料。毎月、小中学生を中心に20人ほどが訪れる。料理の準備をしている間、子どもたちは猫にえさをやったり遊んだりして過ごす。

運営には近隣の飲食店が協力し、食材の一部も提供する。加古川市で日本料理店を経営する迫田美術男さん（49）が調理を手伝い、手巻きずしやそうめんを作る。近くの食パン専門店に規格外品のパンを提供してもらい、サンドイッチを並べたこともある。荒井小4年の石井るなさん（9）は「大好きな猫と遊べて、ご飯もおいしい。来るのが楽しみ」とにっこり。

食堂は9月3日で19回目を迎える。当初は不登校だったが、食堂に通いながら心を開き、学校に行くようになった中学生も。村田さんは「悩みを抱える子に、寄り添ってあげられる場所にしたい」と話す。

子ども食堂は第1火曜午後4～6時。問カフェ☎080・4020・8835

高砂

車いすハンドボールなど
小中学生ら120人体験

障害者スポーツに親しむイベント「ユニバーサルスポーツTAKASAGO」が31日、高砂市総合体育館（米田町島）であった。小中学生ら約120人が参

子ども支える「こども食堂」

首都圏に続々　開設講座盛況

「こども食堂」が首都圏で続々と生まれている。おなかをすかせたり、家で一人で過ごしたりしている子どもたちが、低料金や無料でご飯を食べられる。食堂を始めたい大人向けの講座も盛況。「食」を通じて子どもたちの居場所をつくる取り組みが広がっている。

「そんみょうじこども食堂」で食べながら談笑する親子

安く提供「安心できる居場所に」

「食堂を始めたいが、どうしていいかわからない」「子どもたちにどうやって知ってもらえばいいのか」

東京都世田谷区の存明寺で、この冬開かれた「こども食堂のつくり方講座」。主婦や元教師、会社経営者、地方議員……。都内や埼玉、神奈川、香川各県から参加した19人が車座になり、食堂を運営する4人の「先輩」たちに、場所の探し方やスタッフの集め方などを質問した。

講座は全国各地のこども食堂が参加する「こども食堂ネットワーク」の主催。存明寺住職の酒井義一さん(56)と妻浩美さん(50)も昨年7月に講座に参加し、同9月に「そんみょうじこども食堂」を始めた。毎月1回の午後5～7時、寺の客殿でボランティア8人とキーマカレーを振る舞う。2歳までは100円、3歳以上は200円、大人は300円だ。毎回30～40人がごはんを食べに来る。

浩美さんは「顔と名前がわかる人たちが集う温かい雰囲気の食堂にしたい」。そうした雰囲気の中で、子育てに悩む親が息いを打ち明け、一人でごはんを食べる子どもも安心して来られる場になれば、と願う。当時5歳の長男と2歳の長女と来ていた40代の女性会社員は「保育園の帰りに寄れるので便利」と話した。

講座で食堂の運営者（奥左から3人目）の話を聞く参加者ら＝いずれも東京都世田谷区

■こども食堂を始めるには

①開催頻度や利用者数、どんな人に来てほしいかをイメージする
②寺や公共施設、個人宅、休業日の飲食店など、安価で衛生面がしっかりし、子どもの集まりやすい場所がベスト
③行政機関や学校関係者、民生委員など子どもに関わる人に相談し、地域の事情をきく
④事前に保健所に相談し、食堂の規模や場所、開催頻度に応じた届け出をする。各種保険への加入もおすすめ
（こども食堂ネットワーク事務局による）

東京都練馬区で飲食店を営む只野八朗さん(39)は昨年10月、区民館を借りて「ダイコンこども食堂」を始めた。子どもは無料、大人は300円。毎月第1、第3月曜に開き、子どもや親子連れなど毎回約10人が訪れる。

区内の「ねりまこども食堂」をSNSで知り、見学したのがきっかけだ。日本の子どもの6人に1人が貧困とされることを知り、ショックを受けたという。「食堂なら自分にもできる」。ブログでボランティアスタッフを募集。支援が必要な子どもたちとつながるため、スクールソーシャルワーカーや民生委員、支援団体などを訪ねた。

「いただきます」。午後7時、区民館の大広間に声が響いた。ご飯、サツマイモ汁、チキン南蛮、小松菜と長芋のごまあえ、果物。小学生の2人の子どもがいるシングルマザーの40代の女性は「生活はいろいろ大変ですが、私は気分転換できるし、子どもも楽しみにしています」と話す。

只野さんは「行政や地域とのネットワークを広げたい」と言う。先月、入浴や洗濯もできる2カ所目のこ